個体と経験
—ホワイトヘッドの「改変された主観主義」—

渡辺啓真

ホワイトヘッドは，『科学と近代世界』以降の著作において，「有機体の哲学(philosophy of organism)」と呼ばれる思弁哲学の体系を展開した。そこでは，世界を構成する究極的実在とされるアクチュアル・エンティティーの概念や，抱握(prehension)，永遠的対象(eternal object)，連結体(nexus)など，彼独自の概念が用いられていることもあり，ホワイトヘッドの哲学は，数学や論理学などのように抽象性の度合いが高く，概念の一義性や理論の整合性の方に重点があり，我我の日常的経験からは疎遠な抽象的思弁をこととする形而上学であるとの感を与える。また，彼のアクチュアル・エンティティーの概念は，量子力学の場の理論や素粒子論などとの関連を示唆しており，現代科学の基礎となる新たな自然観を探求する試みであると彼の哲学を性格づけることも可能であろう。

しかし，ホワイトヘッドが『過程と実在』や『観念の冒険』において主題としたのは，アクチュアル・エンティティーのリアルな内的構成(real internal constitution)であり，世界を構成する究極的な実在の概念を基礎にして科学的認識を基礎づけようとすることは，そうした課題の一部であると言わなければならない。何故なら，アクチュアル・エンティティーの内的構成に我々が触れうる場とは，我々自身の主体的経験の直接性においてのほかありえないからである。すなわち，究極的実在が過程であり生成であるとする形而上学的・存在論的主張の根拠は，「いま，ここ」における我々の現実的経験が「流れ」あるいは持続として経験されること以外にもとめることはできないとする点において，ホワイトヘッドもまた，哲学の出発点を我々の具体的経験のうちに置く，近代哲学における広義の経験主義を共有しているのである。『過程と実在』においてデカルトやロック，ヒュームらの基本的前提に対する議論に紙数を費やしているのも，また，

『観念の冒険』においてアクチュアル・エンティティーの概念に替えて「経験の契機（occasion of experience）」という概念を用いたり，ジェームズの純粋経験の概念，「根本的経験論」などに言及しているのも，ホワイトヘッドの関心が近代哲学における経験概念の再検討という点にあったことを物語っていると思われる。つまり，近代哲学あるいはそれに基づく近代科学の経験概念や機械論的自然観がその抽象性を具体性と取り違えている誤り（fallacy of misplaced concreteness）を批判し，切り詰められた経験概念から自由になり，具体的な経験へとたち返ろうとすることこそホワイトヘッドの目的であった。

「経験の無限に多様な構成要素を分類しうる主要ないくつかの範疇を見出すためには，われわれは，契機のあらゆる多様さに関する証拠に訴えなければならない。何物も除外することはできない。泥酔の経験としらふの経験も，眠っている経験と目覚めている経験も，うとうとしている経験とすっかり目をさました経験も，自意識的経験と自らを顧みない経験も，知性的経験と物理的経験も，宗教的経験と懐疑的経験も，不安な経験と心配の無い経験も，予期的経験と内観的経験も，幸福な経験と嘆き悲しむ経験も，情緒に支配された経験と自己を抑制した経験も，光における経験と闇における経験も，正常な経験と異常な経験も。」（AI226）

拙論では，こうしたホワイトヘッドの問題関心に焦点をあてることによって，アクチュアル・エンティティーの内的構成の発生的分析というかたちで主題化されるホワイトヘッドの経験概念を，「改変された主観主義者の原理（reformed subjectivist principle）」と呼ばれている彼の基本的立場に注目することによって，論じることにしたい。

1

我々が日常的経験において意識的に知覚するものは，空間的領域を例示する感覚与件（sensa）であるが，それらの与件は同時的な世界だけでなく，我々の現実的な過去と潜在的な未来をも意味づけている。近代の認識論は，そのように意味づけられた過去と未来とを原的な所与からの何らかの推論によってのみ知られるものであるとし，主観的な自我にとっての実在への手がかりを，領域

を例示する感覚与件が主観的に表示されることへと還元する。こうした方向に進めば，知覚されるものとは，その内容のいかんにかかわらず，知覚者の状態であるか，あるいは知覚者の自我から独立に存在しえないものである，ということになるであろう。ホワイトヘッドによれば，近代認識論は，デカルトによってもたらされたこの主観主義のバイアスを受け入れながら，それとは矛盾するようなアリストテレスの諸概念をも保持している，という点に特徴がみられる。このうち，「宇宙全体は，主体の経験の分析において開示される要素から成っている」(PR 166) という主観主義者の原理（以下〈主観主義原理 1〉と記す）については，ホワイトヘッドの有機体の哲学も形而上学の出発点として受け入れる。しかしホワイトヘッドは，近代哲学における主観主義者の原理を「経験の働きにおける所与は，ただ純粋に諸々の普遍によってのみ十全に分析されうる」(以下〈主観主義原理 2〉と記す）という主張だとも表現している (PR 157)。そして，この〈主観主義原理 2〉には三つの前提があるとされる。第一に，「実体一性質概念を究極的な存在論的原理として認めること」，すなわち，究極的な形而上学的事実は実体に内属する性質という形で表現されうるという前提。第二に，主語となって述語とならないというアリストテレスの第一実体の定義を受け入れること，つまり性質と第一実体（個体）をたがいに排他的クラスとして分離するという前提である。以上二つの前提は特殊と普遍を画然と区別することの根拠となっていると考えられる。そして第三に，経験主体を第一実体だとみなすという前提があげられている (PR 158)。一見して明らかなように，これらの前提は，「主体の経験に形而上学の出発点をもとめる」という意味での〈主観主義原理1〉に必然的に要請される前提ではなく，むしろそれとは必ずしも両立しえないようなアリストテレスに由来する諸概念である。また，以上の前提のうちで，狭義の主観主義に結びつくのは第三の前提であると考えることもできよう。しかし，デカルトの場合のように意識的経験を享受する主体を実体とみなし，それが哲学にとっての第一の所与であるとする立場には，実体一性質という形式を思惟の根本的制約とみなすという前提が含まれている。それゆえ，経験主体を第一実体だとみなすことは，さらに実体一性質のカテゴリーとそれを表現する判断の主一述形式を実体の本質的形式ととらえることと結びついており，その点にお

いて，これら三つの前提は相互に関連しあいながら〈主観主義原理 2〉を成立させていると言える。

では〈主観主義原理 1〉に対して〈主観主義原理 2〉はいかにして結びつくのであろうか。「経験主体は第一実体である」「第一実体は主語となって述語とはならない」という前提から，意識的経験を享受する主体としての実体をいくら分析しても，それの構成要素となっているような他の実体を見いだすことはできないことが帰結する。言い替えれば，実体としての経験主体の分析によって明かになるのは，その実体に内属する性質のみである，ということになる。この帰結は，先に見た三つの前提の背景にある特殊と普遍との画然とした区別に基づくものである。そしてこの帰結を原理として言い替えれば「経験の働きにおける所与はただ普遍によってのみ十全に分析することができる」という〈主観主義原理 2〉が出てくるのである。すなわち，形而上学の第一の所与に関する〈主観主義原理 1〉から特殊と普遍との区別という伝統的な前提を媒介にして主観的経験にとっての所与に関する〈主観主義原理 2〉が生ずると考えられるのである。この原理に基づけば，知覚経験を，普遍的な性質が経験主体とは別の実体を規定しているということの意識として解釈することはできなくなる。それに対して近代の認識論は，私的に知覚された性質が他の個体の実体を表象したり，あるいはそれに類似しているということを何らかの仕方で主張することによってこの結論を避けようとしてきた。しかし，事実と観念，実体と感覚与件との間に視点を据えて比較することの不可能性，という近代哲学のアポリアについては言うまでもなく，主観主義者の原理に従えば，経験主体の私的な諸規定を他の実体の現実存在や性質を意味づけるものとして解釈するという主張さえ正当化できないであろう。感覚与件を解釈するための手がかりは感覚与件そのものによっては与えられないからである（AI 232）。

さらに，主観主義者の原理には，ホワイトヘッドが「感覚主義者の原理（sensationalist doctrine）」と呼ぶ原理が付け加わる。例えば，外的世界に関する感覚的知識を表す場合に，「この石は灰色である」という表現が用いられる。しかし，その前提となる感覚経験そのものは「この石を私が灰色として知覚するこ

と」と表現されなければならないであろう。〈主観主義原理 1〉に従うなら，この事態こそが原的な所与とみなされることになる。しかもその際，〈主観主義原理 2〉に従って，経験の享受を実体一性質のカテゴリーによって理解しようとし，しかも経験の享受そのものが主体を構成している事実であると考えるならば，経験主体を規定している性質とは何であるのかが問題となるであろう。ヒュームは，心を規定している普遍的性質は灰色ではありえないがゆえに，灰色性を感覚していることの意識こそが究極的所与だとみなす。そして経験論におけるこうした前提をホワイトヘッドは感覚主義者の原理と呼ぶのである。「経験の働きにおける第一の活動は，受容に関する主体的形式 (subjective form) を欠いた，所与を主体が単に享受することである」(PR 157)。すなわち，経験の第一の所与はそれを受け取る主体の側の形式からは自由なものとして与えられるのであり，そうした所与とは明晰・判明に知覚される感覚所与に他ならず，経験主体は単に受動的にそこに居合わせるに過ぎない，とする立場である　その場合，我々の具体的経験は，主体無き所与と客体無き主体，形式を欠いた質料と質料無き形式とから構成されると考えられることになる。何故なら，主観性を実体性に従属させる主観主義の原理と感覚主義の原理とが結び付くことによって，経験の具体的内容，すなわち感覚印象をはじめ情動や意図などは経験主体のその都度の特殊な状態とみなされることになり，そうした状態は経験主体にとって偶有的な性質であり，したがって主体それ自身はそうした状態との関係無しに存在し得るものと考えられるに至るからである。さらに，実体の完成した本質に何かが付け加わることはなく，しかも感覚与件は次々に変化するのであるから，感覚与件は主体の偶有的な性質であるということになり，実体としての主体は変化の中で変化しない主体であると考えられるに至る。そして，実体としての主体がそれ自身について持ちうる唯一の知識とは，「自らが普遍による偶然的な規定を経験する経験者である」ということのみとなるであろう。これは，「自らが存在するために他の何物をも必要としない」というデカルトの実体の定義が経験主体にも適用されることを意味しており，経験主体が現実的世界との相互作用から独立に存在し得るとされ，さらに自己自身との相互作用まで拒まれてしまい，その結果「現在の瞬間の独我論 (solipsism of the present moment)」

に陥ることになると，ホワイトヘッドは指摘する（PR 158)。

このようにホワイトヘッドは意識的経験における明晰・判明な感覚所与に出発点を求める経験論の前提の抽象性だけでなく，近代哲学の主観主義に基づく経験概念のうちに含まれている，経験主体を第一実体だとし，特殊と普遍とを排他的なクラスだとする前提に由来する矛盾を指摘するのである。それに対し，経験の享受ということが主体を構成している事実であるという〈主観主義原理 1〉に立つなら，実体―属性のカテゴリーとそれから派生する諸前提は説得力を失うはずである，というのがホワイトヘッドの論点なのである（PR 159)。というのも，我々の知が主観的経験という土台の上に成立し，特殊者としての諸個体からなる世界を我々が知りうるのであれば，世界とそのうちにある特殊な存在者は，現在の瞬間における我々の主観的経験を規定し，あるいはその構成要素となっていなければならない。しかも，そうした同時的世界の経験が成り立つためには，現在の瞬間における経験はその過去と未来によっても規定されていなければならない。すなわち，現在の瞬間の経験は他の瞬間の主観的経験を規定していることになる。逆に，我々が経験する特殊者によって我々が経験されうるのならば，少なくともある種の特殊者は我々と同等の存在論的地位をもつことになる。したがって，主観的経験を享受する特殊者は，互いに他の構成要素となる，あるいは相互に規定し合う能力を有していなければならないであろう。経験の契機の本質には，それ自身を越える他者性に関与するということが属していると考えられる（AI 180)。

こうした理解の前提となる原理として，ホワイトヘッドは「存在論的原理（ontological principle)」と「普遍的相対性の原理(principle of universal relativity)」という二つの原理を提示する。「存在論的原理」とは，アクチュアル・エンティティー，あるいは アクチュアル・エンティティー の現実的連関であるネクサス以外にはいかなる理論的根拠も見いだせないという主張である。これを言い換えれば，「主体的経験の要素として見いだせないようなものは哲学の理論図式のうちに受け入れない」（PR 166）ということであり，経験論の前提を認めることに他ならない。また，「普遍的相対性の原理」は「あらゆる生成に対して潜在的であるということが存在の本性である」という原理である。生成とは今ここでの主体的経験の生成

であり，「ある」といわれうるものはすべて現実的経験の成立にとって潜在的なものとして一定のパースペクティヴの下に関与する，とする原理である。それは，「あるアクチュアル・エンティティーがいかに（how）生成するかが，そのアクチュアル・エンティティーが何であるかの内実（what）を構成する」（PR 166）ということであり，あるアクチュアル・エンティティーが他のアクチュアル・エンティティーによって規定されるあり方こそが，主体としてのアクチュアル・エンティティーが現実的世界に関して享受する経験に他ならないのである。この意味で，「普遍的相対性の原理」は「改変された主観主義者の原理」を言い替えたものであるとされるのである（PR 166）。そして，こうした原理に基づいてホワイトヘッドは，近代哲学における主観主義，経験論の方向を，実体―性質，主語―述語のカテゴリーに従属させることなしに徹底化させようとするのである。

2

さてホワイトヘッドは，一面化され切り詰められてきた経験概念に対し，〈いま，ここ〉の意識として個体化する現実的経験を「過程」と捉えることによって拡張しようとするわけであるが，過程，あるいは「流れ」といっても物理的に考えられた時間概念によって表象される場合のそれではない。そうした時間概念からすれば現実的経験の生起とはむしろ流動停止であるといえよう（SMW 125）。しかし，経験の具体性を瞬時的，現在的な性格にのみ帰するのも直線的に表象された時間概念に基づいた抽象的理解である。ホワイトヘッドにおいてはむしろ，そうした時間概念は，過去的世界，同時的世界，そして未来が一定のパースペクティヴの下に関与することによって現実的経験の生成が生み出す現実性の連関から抽象されたものとみなされるのである。すなわち，過去，現在，未来という時間概念の成立において生起する経験の具体性を過程として捉えることこそがホワイトヘッドの言う過程の意味なのである。

それ故，明晰・判明に知覚される感覚所与を経験の具体性とみなす感覚主義は，経験を瞬時的・現在的なものとみなす点でも，経験主体を基体としての実体とする立場と結びつくことで，「現在の瞬間の独我論」に陥るとみなされるこ

とになる。ホワイトヘッドはそうした感覚主義者の前提に対して，具体的経験の生成の原初的な層として，意識的経験に先立つ曖昧で情緒的な経験に注目する。そうした経験の働きは，意識的というニュアンスを排除するために，抱握(prehension)という言葉で表現されるが，さらに過去的世界を自らの構成要素として積極的に抱握することを感得(feeling)といっていることからもわかるように，経験の具体性は情緒的なものとみなされるのである。しかし，そこでは基体としての経験主体があらかじめ前提されているのではなく，したがって，それを所謂主体の特殊な状態としての主観的な感情と同一視して捉えてはならない。というのも，現実的経験の生成とは経験主体の生起の過程に他ならず，経験の原初層とは，主体となる過程の起点であるからである。ホワイトヘッドはそうした新たな経験の始源は直接的過去の現在への内在，あるいはその個体性を達成し決着をみた過去的諸アクチュアル・エンティティーズの客体化(objectification)によると考えている。それは，我々の日常的経験においては，情緒的体験の持続における直接的過去への順応というかたちで経験されるものである。「根本的事実とは，関与する諸事物から生ずる情感的色調(affective tone)の発生である」(AI 176)。そうした経験のあり方は主体のその都度の構成の働きによるものではなく，客体から主体へという方向で捉えられなければならない。そしてそこに因果性の根拠が見いだされることから，所謂感性的知覚において無視される非一感性的知覚が「因果的効力の様態における知覚(perception in the mode of causal efficacy)」と呼ばれるのである。情緒的経験の順応という事態は，客体化された過去のアクチュアル・エンティティーに対して新たなアクチュアル・エンティティーの抱握の主体的形式が順応し，過去的世界を反復することとして理解される。

しかし，その際，先に述べたように，時間的に存続する経験主体の同一性が予め前提されているわけではないことに留意しなければならない。ホワイトヘッドは経験の主体一客体構造を「知るもの」と「知られるもの」との関係と同一視する立場を退ける(AI 175)。知るものが主体であり，知られるものが客体であるという前提には，知る主体と知られる客体が異なる存在領域に属するものとみなされ，経験の内と外との区別が時間の経過に関わらず絶対視されるということが結びついている。そうした前提に基づくならば，知る主体の時間的存続，自

己同一性と知られる外的世界の実在性との関係の問題は，一方を他方に還元するか，別々の説明原理を与えることによって答えられなければならなくなるであろう。それに対して，ホワイトヘッドにとっては経験が過去・現在・未来という時間性の成立と共に主体として生成し個体化する過程が出発点であり，そうした過程の生起に基づいて「知るもの」「知られるもの」という形で現れる経験の局面が説明されなければならない。例えば，「いま，ここ，での私の経験」という形で成立する経験の相は，我々が自らの経験の個体性を意識する瞬間と言えようが，経験の個体的直接性は「その両側を本質的相対性によって限界づけられている」(AI 177) と考えられる。何故なら，現実的経験とは個体と成る過程であり，そうした個体性の達成によって初めて内と外との差異化が生ずると考えられるからであり，さらに個体としての経験はその主体的直接性を失って新たな現実的経験に対して客体化されると考えられるからである。つまり「経験は関与する諸客体から生起し，他の現実的経験に対する客体の地位へと消滅する（その主体的直接性を失う）」ということが，経験の個体性にとっての相対性ということの意味なのである。それ故「主体一客体」という概念区分自体がホワイトヘッドにおいては相対的であると言えよう。

さて，客体という語はホワイトヘッドによれば「経験する契機に対する在るもの (entity) の関係を表現している」(AI 178) とされるが，そうした関係が成立するためにはその在るものが先行しており与えられるのでなければならない。つまり直接的現在として成立する経験はその原初層において諸客体を自らのうちに受容すること (reception) にその始源を持つと考えられる。経験のそのような受動的生起をホワイトヘッドは直接的過去への順応と捉えているわけであるが，真に存在するものを現実的経験とする存在論的原理に従えば，現実的経験の存在からの派生的な意味で「在る」と言われ得るものは，潜在性と言える。しかし，それはまったく無性格な受動的質料を意味するのではない。経験に与えられる世界は，この経験が獲得する個体性の持つ統一に対しては，一種の非決定性を持つといえるが，それ自体の規定性 (definiteness) を獲得した世界でもある。我々は経験の原初層において常に既に分節化された「頑固な事実 (stubborn fact)」に出会うのであり，それゆえ過去的世界は（法則性によって理解される決定論的

世界ではなく，それ自身の活動性によって成立ち，言語を始めとする歴史的経験や，個人の生の歴史の累積とみなされる）条件付けられた非決定（conditioned indetermination）として「リアルな潜在性（real potentiality）」と呼ばれるのである（PR 23）。

このようにホワイトヘッドが因果的効力の知覚様態と呼ぶ経験の原初層に注目する根拠には，因果性の概念を再検討しようという意図をもみてとれよう。因果性の概念を実体性の概念に従属させることによって，実体相互の因果的関係を実体に固有な現実性に対して二次的で現象的なものとみなす立場，あるいは唯一の実体とその様態としての有限な存在に対して二種の因果性を設定する立場には，実体の内部と外部，内的関係と外的関係との区別が基準として前提されなければならない。しかしそうした内部と外部の基準をどこに設けるかという点に関する見解は身体性の問題に見られるように恣意的なものとならざるをえないであろう。私の身体がどこで終わり，外的世界がどこから始まるのかの境界は常に曖昧なままであり，むしろ身体によって我々は諸々の現実態の相互作用を経験するのである（MT 114）。また実体と因果性の概念を経験的認識における対象構成の形式とみなし，対象の経験と経験の対象とをいわば同一視する立場においても，問題は対象化以前の地平へとずらされてしまう。そして，認識の主観的形式と対象の客観的形式との関係の問題は擬似問題として未決定のままに残されることになるであろう。

それに対してホワイトヘッドは，存続する基体としての実体性の概念を現実的経験に適用せず，そのつど新たな経験がそれ自らの生の歴史を含む過去的環境的世界から生起してくることとして因果性を捉えている。したがって，因果性の概念は，新たに生起する経験がリアルな潜在性としての現実的世界に帰属することの根拠であり，規則にしたがった諸対象の関係に過ぎないのではなく，諸主体（観）のリアルな現実的連関を成立させているものだと言えるのである。つまり，他なるものによる因果的規定という因果的効果の働きのうちには，対象的な規定性・合法則性に解消してしまうことのできない，過去のアクチュアル・エンティティー自身の自己解釈・自己規定という一回限りの契機が含まれているのである。そして新たに生成する主体は，そうした契機を相続しながら，現実性・可能性・偶然性

の連関のなかで自己規定を行い，それが次なるアクチュアル・エンティティーへと相続されると考えられるのである。その一方で，存続する基体としての実体概念はアクチュアル・エンティティー相互の連関において一定の規定性，性格が相続されることとして理解されることになる。つまり実体性は，現実的世界のリアルな因果連関におけるイデアールな形式として解釈されることになるのである。

3

ホワイトヘッドはこうした因果的効力の知覚様態の働きを物理的抱握（physical prehension）と呼び，経験の過程の原初層とみなすのであるが，一方，所謂感性的知覚を「現前的直接性の知覚様態（perception in the mode of presentational immediacy）」と呼んでいる。それは，「個々ばらばらの感覚印象」が空間的に広がった状態で直接的に現前する知覚様態であるが，そこでは個々の感覚印象は過去的環境世界の規定性としての連関から抽象された普遍として感得される（概念的抱握〔conceptual prehension〕）。感覚主義と呼ばれている経験論はこの現前的直接性の知覚様態に究極的所与を求めるのだが，ホワイトヘッドはそれを，過度の抽象を具体性と取り違えることであると批判し，具体的な知覚の在り方を，因果的効力の知覚様態と現前的直接性の知覚様態との間の象徴的指示連関（symbolic reference）であると考えるのである。感覚主義の誤謬は，現実的世界連関における因果的活動性を派生的で理論的に導出されるべきものとみなし，より派生的で抽象的な要素を根源的な所与とみなす点にある。

この二つの知覚様態の間の象徴的指示連関の成立は，こうした知覚様態の区別が生じているアクチュアル・エンティティーにおいては常につきまとう働きである。しかもこの二つの知覚様態のいずれが記号となり意味となるかは，一義的に決定できない。通常は，知覚表象説のように，明晰・判明に識別された感覚所与が過去的世界から順応的に感得された所与の象徴的表現として述語的機能を果たすと言えるが，逆に，真っ暗な部屋に置かれた時のように，周囲世界から感得された漠然とした情緒的雰囲気が外的対象の述語的規定として象徴的に機能することもあると考えられるだろう。このことは，我々が知覚経験に

おいて形式と内容として分離する際の区別もまた固定的なものではありえないということを意味していると思われる。

このように，生命，あるいは有機体とホワイトヘッドが呼ぶものの根本的な在り方として，述語的規定による有機体相互の連関は多様な象徴的諸機能によるコンテクストにおいて生ずるという点を指摘することができよう。さらに，有機体それ自身の自己理解が象徴的機能によってなされる以上，その有機体が一義的に規定されたものであるとはいえず，またまったく無規定であるとも言えなくなる。したがって，アクチュアル・エンティティーズ相互の連結体として一定の性格を保持するとされる有機体，ホワイトヘッドの言葉を使えばアクチュアル・エンティティーズの社会（society）の結び付きを可能にしているものの一つがこのような象徴的関係であると言うこともできるであろう。

また，我々の現実的経験もすでに知覚のレベルにおいて象徴的な解釈を含んでいるとされるわけであるが，そこには，個体的満足へといたる経験の過程が過去的環境的世界から受容された複雑で曖昧な所与を内容と形式，記号と意味などのように分節化し，一定のコントラストの下に総合する過程であるという基本的前提がある。例えば，命題とは物理的に感得された現実的世界（あるいはその一部）を主語とし，概念的に感得された抽象的可能性としての永遠的対象を述語とするコントラストであるとみなされている。そして，我々が意識的知覚や判断と呼ぶものは，命題がさらに現実的世界の連関であるネクサスとのコントラストにおいて，いわばコントラストのコントラストとして感得されるのだと考えられている。したがって，経験の過程は条件付けられた非決定，リアルな潜在性としての過去的世界に一定のコントラストの下で規定性を与えるべく決定すること（determination）であり，そのことが同時に個体としての現実的経験の自己決定となるのである。

それゆえにまた，経験の過程は所与の曖昧な要素あるいはコントラストにおいて不調和な要素を排除すること（否定的抱握〔negative prehension〕）を本質的に伴っている。例えば，習慣において示されるように，我々の人格的な生の歴史はそうした選択的排除を強化する働きであると言えよう。たとえ，我々のそのつどの現実的経験の発生が身体を通じた環境世界との連関を含む多次元的なも

のであるにせよ，そうした連関自身のうちにも，ある規定性を選択的に強化したり排除したりする働きが常に伴っているであろう。

特に，意識の発生は前意識的な経験の過程において所与を無規定なままに否定的に抱握するということに制約されていると考えられる。そして，否定性が意識の発生において果たす役割は否定的判断において顕著になるとホワイトヘッドは主張する。意識とは，誤りであるかもしれない理論と与えられた事実との間のコントラストを感得する際の主体的形式であると定義されるのであるが，否定的判断においては，そうでありえたかもしれないが実際にはそうでないものの欠如を感得し，この欠如を実際に現前しているもののもつ排他性によるものとして感得するという働きが前面に押し出される。すなわち，現実性と可能性とのコントラストが両立不可能な矛盾（incompatibility）として感得されるとき，意識という主体的形式が最も強化されるということになるのである。

こういったホワイトヘッドの主張には，経験の価値を過去的世界の単なる反復や模写に求めるのではなく，ある信念が懐疑にさらされる場合のように否定性の意識を通じて新たな可能性へと経験が開かれることに個体的経験の本質を見いだそうとする立場が表れていよう。そして，新たな可能性を積極的に経験のうちに統合しようとする働きは，単なる否定的判断ではなく，「宙吊りにされ，留保された判断（suspended judgement）」であるとされている（PR 274）。留保された判断においてコントラストは，直接的・肯定的確実性という閉じた形式において，あるいは両立不可能性として体験されるのではなく，想像された述語（imagined predicate）が，主語となる現実的連関を客体化している述語（ないしその一部）との一致を見いだしえないにもかかわらず，両立可能なものとして感得されるコントラストである。すなわち，このコントラストは，実際にそうである理論的主語の規定と同じ主語がさらにそうでもありうるような規定性との間に成立するコントラストであるといえる。そしてこのように，判断において肯定でも否定でもなく，信念でも非信念でもない状態が生ずるのは例外的な事例なのではなく，判断の持つ imaginative な性格を最も顕著に示す例であり，むしろ我々が明確に肯定・否定という意識を持つことの方が極端な場合なのである。留保された判断は新たな可能性の実現に対する経験の開けを可能にし，科学理論

の進展にとっても本質的な働きである。

また，留保された判断がホワイトヘッドの哲学において果たす役割として次の様なことが指摘できるであろう。すなわち，留保された判断こそが，過去的世界の客体化に含まれている諸々の制限を意識させるのであり，もし我々が想像的な感得と事実との比較において，実際そうであることとそうではないことをしか知り得ないのであれば，客体化に際して一定のパースペクティヴに基づく排除が働いているということをそもそも知り得ないことになってしまう。しかし，「人間は，自らの経験に適用可能な基本的諸観念をすべて意識的に享受している」という信念（MT 173）から自由になり，我々の有している辞書が完全ではありえないということを自覚するうえで，停止された判断はホワイトヘッドの方法論的概念としても重要な意味をもっていると思われる。

4

このようにホワイトヘッドは，命題や判断の機能を真・偽よりも関心を引く（interesting）か否かという点に求めており（AI 244），意識の自明性はもはや認識の卓越した真理基準としてではなく自己自身に関する誤解の可能性をも含むようなものとみなされる。何故なら，一回的，個体的な仕方で生起する主体的経験の根本構造は，或る歴史的エポックのなかにおいて過去・現在・未来という時間性の成立とともに，過去的世界への順応と自己自身の活動性との連関を自己と世界あるいは現実性と可能性との連関として解釈する過程であると考えられるからである。そしてその過程は，過去的世界の反復ではなく，諸抱握の差異化に基づくコントラストを感得し，一方ではその直接的主体性において，他方では関連する未来に対して，そうした感得の強度（intensity）を獲得することを目的とする自己決定の過程なのである。すなわちホワイトヘッドにおける主観性，主体性とは，解釈の過程において達成される体験の強度として理解されている。そのうちにおいて主体が生起する経験の契機の生成過程とは，自己の規定性を獲得（高度の知的存在の場合にはそれを認識）しようとする目的論的な志向と努力に導かれており，その規定性の強度は真か偽かということによってのみ制約されるのではないと考えられるのである。

このことはまた，ホワイトヘッドの有機体の哲学自身が，歴史的諸制約から自由な最終的真理を標榜するものではなく，一つの歴史的エポックにおける世界理解の諸制約を定式化し，実在世界についての哲学的諸概念と日常経験の世界とを和解させるような基本的カテゴリーを提示する仮説的理論であるにとどまるということを意味してもいる。そして主観性を基体としての実体性の概念に従属させることへの批判は，実体の形而上学が現実的経験の歴史性を知の根本制約として認めないことに向けられているとも言えるのである。

「哲学はそれ自身の主観性の過剰を意識することによる自己訂正の営みである。……哲学の仕事は，選択によって覆い隠された全体性を回復することである。それは，高次の感覚経験のうちに沈澱し，意識自体の最初の働きによってさらに深く沈んでしまったものを合理的経験のうちに取り戻すのである。」(PR 15)

本文中に引用したホワイトヘッドの著作略号を以下に記す。

PR: Process and Reality, Corrected Edition. New York; Macmillan, 1978.

AI: Adventures of Ideas. New York; Macmillan, 1967.

SMW: Science and the Modern World. New York; Macmillan, 1967.

MT: Modes of Thought. New York; Macmillan, 1968.

（わたなべ　ひろまさ）